

砂雪隠 堀込柱内に踏石丸き塵穴、蕨箒、觸杖、箒子あり、御影石か白川石かの屑を真中と偶とに盛る、入口の石を戸下の石といふ、兩方を踏石といふ、向を小便返しと云、後をウラ返し、此四ツの石の間より砂を撫込み勝手の方に積む、砂雪隠ある庭には、外に蕨箒不用なり。

〔南方録二〕雪隠

露地雪隠は、禪林の清規百丈の法式つまびらか也、總て茶堂腰掛は、侘一偏にて、古柱古竹等も用る也、便所道具は、侘にても新敷清淨成を用る事、肝要也、會の時は客雪隠の内を見る事も、禪林に便所の役を淨頭ジチとして、歴々の道人和尚達のせらる、例多し、修行の心持有る事も、客も其心持有、又侘にも亭主は雪隠を格別に改め心を用る故、客も主の心入をゑるため共云へり、又利休の比迄は、亂世の砌故、野心の者雪隠にかくれて仇をなしたる事共有り、漢和其類あり、客の内末座に醫者隠者等加りては、殊更に心を付て、上客より先に雪隠に氣を付る事、肝要也、曉會夜會殊更也、露地の雪隠、禪林の清規を以てする事といへども、少ヅ、の差別有、手桶、面盆に糠塵取、帚、杯品々の事共有、塵取を塵穴に仕替持する様に、少は差別有、掛り縁打様等秘事口傳、外に用を辨する爲常のごとく、またる雪隠あるべし。○中略

雪隠之内用意之事

客來前、疾と水を打掃除仕舞て、其後乾砂キを手桶に取寄、山なりに立、其上に觸杖をさす、路次に路の清にも乾砂を立、御幸御成の道邊にも乾砂勿論の古例なり、俄にいかやうの不淨出來べきも計がたし、其時の清の爲也、夕立杯に水たまりも有事也、根本鹽湯をとり清をする本意也、雪隠の砂も不淨をおほひ清むる爲也、いつとなく常住に砂を入置、又水を打掛て濡砂にする事、大成違却也、開戸水にて流して立べし、夏の夜會には開戸明置たるよしと云説有、さしこめたる所には蚊杯多く籠り居て、うつく敷故の事なるべし。